

# 中華人民共和国成立初期の 「記念節日資料」中の毛沢東略伝について

小野寺 史 郎

はじめに	157
I 日中戦争期・戦後内戦期の中国共産党指導者の 「祝寿」と暦法問題	158
II 中華人民共和国成立初期の「記念節日資料」中の 毛沢東略伝	163
おわりに	177

## はじめに

---

日中戦争中もしくは戦後の早い時期から中国共産党の勢力下にあった農村根拠地や旧満洲国地域においては、様々なメディアを用いて党の指導者や政策に関する宣伝が行われていたことが知られる<sup>(1)</sup>。しかしそれでは1949年になって初めて共産党の統治下に入った都市部や南方などでは、毛沢東のイメージはどのように流通したのか。本稿は、中華人民共和国成立直後に民間の書店から出版された各種記念日に関する小冊子や書籍（本稿では以下「記念節日資料」と呼ぶ）を題材に、この問題を検討する。

「記念節日資料」は、中華民国期に多数の記念日が制定されたことで、政府と民間の書店などがそれぞれ作成・刊行し始めたもので、多くの場合小冊子の形式を取り、主に党・政府機関、学校、職場での講話の材料などに使われた。こうした「記念節日資料」は、中華人民共和国成立初期にも多数が制作・出版されたことが確認できる。そしてその中には多くの場合、毛沢東の誕生日が収録され、その誕生から青少年期、マルクス主義の受容、共産党への参加といった半生が略伝の形式で説明されていた。そのため「記念節日資料」は、新聞・雑誌、教科書、通俗読みものや連環画などと並んで、都市部や南方の人々が、毛沢東という人物の情報に初めて触れる印刷媒体の一つであったと考えられる。

ただ、民間の書店による出版物ではあっても、毛沢東の伝記である以上、それは当然ながら党・政府の指導を受けるものであり、またその度合いは出版物自体に対する規制の強化や、企業の公私合営化の進行に伴って強まっていった。特に、売れ行きの好調だった「記念節日資料」は頻繁に再版されたが、その再版の際に明らかに党・政府の指導に基づく改定が加えられている事例が散見される。それらの事例に着目して、当時の共産党がどのような形で毛沢東のイメージを流通させようとしていたのか、その一端を探ってみたい。

なお、以上は他の印刷媒体にも共通する問題だが、「記念節日資料」に特有の論点もある。たとえば、日中戦争期・戦後内戦期の共産党の政治文化において、指導者たちの誕生日に「祝寿」行事を行うことは一般的だった。しかし毛沢東は自らの誕生日に公式の祝賀行事を行わず、内戦末期には共産党指導者の「祝寿」自体を禁じてしまう。このため、毛沢東の誕生日は、その存命中においては、みな知っているにもかかわらず党・政府の記念日ではないという位置づけにあった。この特徴が「記念節日資料」の記述にどのように反映したのかにも注意してみたい。

## I 日中戦争期・戦後内戦期の中国共産党指導者の「祝寿」と 暦法問題

---

### 1 近代中国における指導者の誕生記念

最初に、近代中国において、指導者の誕生記念行事がどのように行われてきたのかについて簡単にまとめておく。

権力者の誕生日を祝う習慣自体は中国では古くから存在していた。ただ、皇帝の誕生日を広く臣民の忠誠を獲得する手段として利用するという発想は、清末の新政期に西洋から導入されたものだった<sup>(2)</sup>。

辛亥革命以降、国民党においては、革命事業の中で命を落とした「烈士」を顕彰する記念日として、その人物の死亡した日に儀式を行う政治文化が構築される<sup>(3)</sup>。これは後の共産党においても同様だった<sup>(4)</sup>。

そのため孫文が1925年3月12日に死去すると、国民政府は翌1926年より同日を「大元帥逝世記念日」として休日とすることを定めた。さらに、国民党サンフランシスコ市総支部の要請で、ワシントンの例に倣い、孫文の誕生日を「孫総理誕期慶祝日」とすることを定め、日付は息子の孫科に確認の上、陽暦11月12日となった<sup>(5)</sup>。日中戦争中の1939年には、国民党党務委員会が、やはりワシントンの例に倣い、孫文の記念を誕辰記念日だけとすることを提案し、その結果、1942年の規定改正の際に、総理逝世記念日は削除されることと

なった<sup>(6)</sup>。こうして国民党・国民政府の下で指導者の誕生記念という政治文化が生まれた。

ただし、誕生日を記念日として利用するには、近代中国に特有のいくつかの問題が存在した。中でも重要なのが、暦法と日付の問題である。

1912年1月1日に中華民国が成立した際、政府機関などは従来の陰暦（夏暦）を改め、陽暦（グレゴリオ暦）を使用すると定めた。そのため、それ以降に起きた事件や死去した人物について公的に記念する場合には、基本的に陽暦の日付が採用された。しかし誕生日について言えば、中華民国期の政治指導者は基本的に1911年以前の生まれであり、多くは自分の誕生日を陰暦で把握していたと考えられる。そのため、私的な祝賀であれば別だが、公的な行事として誕生日を利用すると、陰暦の日付を使用するか、陽暦の日付を使用するかという問題が生じるようになった。

## 2 日中戦争期・戦後内戦期共産党指導者の「祝寿」行事

日中戦争期・戦後内戦期の共産党の機関紙などを見ると、指導者の「祝寿」に関する記事が時折見受けられる。そこでこの陰暦・陽暦の日付の問題がどのように処理されていたのかを見てみたい。

日中戦争中の1942年12月16日は、国民革命軍第十八集團軍一二九師師長劉伯承の「五十寿辰」とされ、朱徳が祝辞を贈った他、各地の党部より祝電が送られた<sup>(7)</sup>。ただ劉伯承の誕生日は現在では1892年12月4日<sup>(8)</sup>（壬辰十月十六日）とされる。1942年の陰暦十月十六日は11月23日のため、陰暦でも陽暦でも日付が合わない。折衷的に、月は陽暦、日は陰暦を使用したという可能性がある。

1943年12月21日（陰暦十一月二十五日）は、当時中国民主政団同盟から国民参政会参政員となっていた沈鈞儒の「七十寿辰」とされ、12月19日から3日間、勵志社で画展が開催されることが『新華日報』（重慶）で報じられている<sup>(9)</sup>。沈鈞儒は1875年1月2日（甲戌十一月二十五日）生まれのため<sup>(10)</sup>、ここでは明確に陰暦の日付を使用していることがわかる。七十歳というのも、数え年（虚歳）によるものである。

1945年9月に日中戦争が終結し、1946年6月に国共内戦が再開される。この時期の共産党による最も大きな「祝寿」の催しは、1946年末に行われた朱徳の「六十大寿」である。共産党は、同年の陽暦11月30日を朱徳の「六十大寿誕辰」とし、前後合わせて3日間、陝甘寧辺区各地で国旗を掲揚してこれを祝った<sup>(11)</sup>。当時『新華日報』（重慶）に掲載された「朱徳將軍年譜」にも「一八八六年 十一月三十日誕生於四川儀隴馬鞍場琳瑯寨一個農家」とある<sup>(12)</sup>。ただ、現在では朱徳の誕生日は1886年12月1日<sup>(13)</sup>（丙戌十一月初六日）とされる。そのためこれは、もともと陰暦で把握していた日付を陽暦に変換する際に計算を誤っ

た可能性が高い。

一方、興味深いことに、『人民日報』（晋冀魯豫）や『新華日報』（太行版）には、「【新華社延安二十六日電】本月二十九日，是十八集團軍朱德總司令六十壽辰，延安雖處在蔣介石軍進攻的威脅中，但各界人民仍熱烈地籌備慶祝，他們對於這位偉大的中国人民救星，表示衷心愛戴」<sup>(14)</sup>「上月廿九日，是人民解放軍朱總司令六十大壽，……」<sup>(15)</sup> というように、正しく陰曆十一月初六日 = 1946年11月29日に誕生祝いをを行ったという報道が見える。

ほぼ同時期に行われた徐特立の「七十大寿」でも同様の日付の混乱が見られる。1946年12月、陝甘寧辺区で徐特立（1877年2月1日 = 丙子十二月十九日生<sup>(16)</sup>）の「七十大寿」（数え年）の慶祝を行うと新華社が発表した。しかし『新華日報』（重慶）と『人民日報』（晋冀魯豫）でこの電報の解釈は異なるものだった。『新華日報』は「▲延安十二日電 本月十九日是中共中央委員、中共中央宣伝部副部長徐特立同志七十壽辰，辺区各界將舉行盛大慶祝。（新華社）」<sup>(17)</sup> として、本月つまり陽曆12月の19日に慶祝を行うものと解した。これに対し『人民日報』は「【新華社延安十二日電】一九四七年一月十日（旧曆十二月十九日）是中共中央委員、中央宣伝部副部長著名教育家徐特立之七十生辰，屆時辺区各界將舉行盛大慶祝。」<sup>(18)</sup> としている。実際の祝賀行事は陰曆十二月十九日つまり1947年1月10日に挙行されたため<sup>(19)</sup>、『人民日報』の解釈の方が正しかったということになる。当時の重慶では、国民政府の徹底した国曆（陽曆）推進政策により、陰曆や陰陽曆対照表が出版禁止とされていたため、こうした日付の誤りには、その影響も考えられる<sup>(20)</sup>。ちなみに『解放日報』（延安）は1944年1月1日以降、『抗戦日報』（晋綏）は1944年9月18日（三日刊から日刊に変更）以降、『新華日報』（太行版）は1945年1月1日以降、『新華日報』（太岳版）は1945年2月13日（陰曆正月初一日）以降、『人民日報』（晋冀魯豫）は1947年1月1日以降、陽曆（中華民国紀年）に加えて陰曆（夏曆）の日付と節気を併記しているが、『新華日報』（重慶）は1947年2月28日の停刊まで陽曆しか記載していない。

一方、華北大学校長呉玉章の「七十大寿」は1948年12月30日（戊子十二月初一日）に開かれたが<sup>(21)</sup>、呉玉章の誕生日は1878年12月30日<sup>(22)</sup>（戊寅十二月初七日）とされるため、これは満年齢かつ陽曆に従っている珍しい例と言える。

いずれにせよ以上から、日中戦争期・戦後内戦期の共産党において、指導者の「祝寿」行事が一般的であったこと、またそれらの誕生記念の日付が、例外はあるものの、多くの場合陰曆に従っていたことがわかる。

しかし、毛沢東については、その誕生日（1893年12月26日<sup>(23)</sup> = 癸巳十一月十九日）に何らかの公的な祝賀行事をしたという記録を、当時の共産党機関紙や『毛沢東年譜』から見つけることができない。ただ毛沢東の秘書などを務めた謝覺哉の日記によれば、公式の

行事ではなく、党幹部たちによる小規模な祝宴などは行われていたようである。例えば1945年1月2日（陰曆十一月十九日）には、林（彪）・高（崗）・羅（瑞卿）・謝覚哉らが、毛沢東に新年のあいさつに赴いているが、毛の誕生祝いを兼ねたとされている。また1945年12月23日（陰曆十一月十九日）には、謝覚哉が毛沢東の52歳（満年齢）の「生日宴」に出席したという記述がある<sup>(24)</sup>。ここからこの時期には毛沢東も旧暦で自らの誕生日を把握していたことは間違いない。

なお、毛沢東と同郷である共産党員の蕭三が1940年以降、毛の伝記を発表し始めるが<sup>(25)</sup>、1946年7月に雑誌『北方文化』（張家口）に発表された「毛沢東同志略伝」では、毛の誕生日について「毛沢東同志，一八九三年（陰曆癸巳，清光緒十九年）十一月十九日生於湖南省湘潭縣韶山冲」<sup>(26)</sup>と、日付が陽暦か陰暦か判然としない書き方になっている。これらを修正してまとめた『毛沢東同志的青少年時代』が1949年8月に刊行された際には「公曆一千八百九十三年——清光緒十九年，陰曆癸巳十一月十九日，在這所房子裏誕生了毛沢東同志」<sup>(27)</sup>と、陰暦の日付であることが明確な表現に書き改められた（ただしやはり陽暦の日付は明示されていない）が、「毛沢東同志略伝」の日付の記述のわかりにくさは、後に見るように、中華人民共和国成立初期の「記念節日資料」に一定の混乱をもたらすことになる。

### 3 中華人民共和国成立前後の記念日政策と指導者の「祝寿」禁止

国共内戦の最中の1948年4月17日、東北行政委員会は「記念節日紀念辦法」を發布した。ここに記載された記念日は、新年（放假3日）、「二七」紀念（1923年の京漢鐵路大罷工）、春節（放假3日）、國際婦女節（3月8日）、中国兒童節（4月4日）、國際勞動節（放假1日）、中国青年節（5月4日）、國際護士節（5月12日）、夏節（端午、放假1日）、中国教師節（6月6日）、中共誕生紀念（7月1日）、「七七」抗戰紀念（放假1日）、人民解放軍誕生紀念（8月1日、放假1日）、「八一五」解放紀念（放假1日）、中国記者節（9月1日）、「九一八」紀念、秋節（中秋、放假1日）、辛亥革命紀念（10月10日、放假1日）、国恥紀念（11月4日、1946年の中米友好通商航海条約締結）の計19である<sup>(28)</sup>（表1）。労働節を全国民の休日とし、代わりに「二七」を労働者の記念日と位置づけている点、人民解放軍誕生紀念は休日だが、中共誕生紀念は「党内紀念」とのみ規定している点が特徴と言える。

共産党はこの後、1948年9月から1949年1月にかけて行われた三大戦役に勝利し、1月31日に人民解放軍が北平に入城した。3月5日から13日にかけて河北省西柏坡で中国共産党第七屆中央委員会第二次全体会議が開かれたが、毛沢東は会議最終日に党の活動に関する報告を行い、「禁止給党的領導者祝寿，禁止用党的領導者的名字作地名、街名和企業的名

表1

	記念節日紀念辦法 (1948年4月17日)	統一全国年節和紀念日放假辦法 (1949年12月23日)	1951年の変更
1月1日	新年（放假3日）	新年（放假1日）	
正月初一	春節（放假3日）	春節（放假3日）	
2月7日	「二七」記念	二七記念	
3月8日	国際婦女節	婦女節（部分放假）	
4月4日	中国児童節		
5月1日	国際労働節（放假1日）	労働節（放假1日）	
5月4日	中国青年節	青年節（部分放假）	
5月12日	国際護士節	護士節	
五月初五	夏節（放假1日）		
5月30日		五卅記念	
6月1日		児童節（部分放假）	
6月6日	中国教師節	教師節	（労働節に合併）
7月1日	中共誕生記念		
7月7日	「七七」抗戦記念（放假1日）	七七抗戦記念	
8月1日	人民解放軍誕生記念（放假1日）	人民解放軍建軍記念日（部分放假）	
8月15日	「八一五」解放記念（放假1日）	八一五抗戦勝利記念	（9月3日に変更）
9月1日	中国記者節	記者節	
9月18日	「九一八」記念	九一八記念	
九月初九	秋節（放假1日）		
10月1日		国慶記念日（放假2日）	
10月10日	辛亥革命記念（放假1日）		
11月4日	国恥記念		

字、保持艱苦奮闘作風、制止歌功頌徳現象」として、指導者の祝寿、地名などに指導者の名をつけることを禁止した<sup>(29)</sup>。直後の3月25日に中共中央委員会と人民解放軍総部が北平に移転し、同日の『人民日報』でも七届二中全会の報告として「全会指出：中国的革命是偉大的，但是奪取全国革命的勝利只是工作的第一步，革命以後的路程更長，工作更偉大，更艱苦。全会号召全党同志繼續保持謙虛、謹慎、不驕、不躁和艱苦奮闘的作風，以便在打倒反革命勢力之後，用更大的努力来建設一個新中国」ことが発表された<sup>(30)</sup>。前述のように、毛沢東はこれ以前から自らの誕生日を公的に祝うということを行っていなかったが、それが党全体に徹底されることになったのである。

七届二中全会は、共産党が農村から都市へと工作の重心を移した転換点とされる<sup>(31)</sup>。そのため、「艱苦奮闘的作風」の強調は、都市住民や民主党派などから支持を得るための配慮とも考えられる。

同年4月21日に人民解放軍が長江渡河を行い、5月28日には上海人民政府が成立した。そして10月1日には北平から改名した北京で中華人民共和国の成立が宣言された。

12月23日、政務院第十二次政務会議を「統一全国年節和紀念日放假辦法」が通過した。この辦法は、新国家の記念日を以下のように定めた。

甲、全体に属すもの：新年、春節（放假3日）、労働節、国慶紀念日（放假2日）。

乙、部分人民に属する節日（放假半日、もしくは記念活動に参加する代表のみ放假）：婦女節、青年節、兒童節（6月1日）、人民解放軍建軍紀念日。

丙、その他：少数民族習慣の節日は放假。二七記念、五卅記念、七七抗戰記念、八一五抗戰勝利記念、九一八記念、護士節、教師節、記者節などはいずれも放假としない<sup>(32)</sup>。

1948年4月の「記念節日紀念辦法」とは、夏節・秋節の削除、新年の休日削減、「七七」と「八一五」を平日に変更、中共成立記念の削除、といった点で変化がある。伝統節日が削除され、陽曆使用の傾向が強まったことも指摘できる。

この後、6月6日の教師節の廃止<sup>(33)</sup>、8月15日から9月3日への抗日戦争勝利日の変更<sup>(34)</sup>といった若干の変化はあったものの、この規定は以後、1999年9月18日に國務院が「全国年節及紀念日放假辦法」を發布して一部修正するまでほぼそのまま使用されていくことになる<sup>(35)</sup>。

ここで規定された記念日は、基本的にはいずれも日中戦争期・戦後内戦期に共産党が行ってきたもので、婦女節・労働節・兒童節など国際的な記念日と、五四運動以来の共産党史および日中戦争に関する記念日からなる。ただし、前述のように中共成立記念日は含まれていない。また、内容は休日にするか否かということにとどまり、儀式の挙行方法などに関する規定は含まれていない。この点は、記念日ごとの儀式内容を詳細に定めた国民党政権の記念日に関する規定とは大きく異なる。国慶日や烈士追悼に対する重視などでは共通する点もあるものの、記念日利用の手法に関しては総じて従来の根拠地の手法が援用され、国民党政権から継承した要素は少なかったと見なすべきだろう。

## II 中華人民共和国成立初期の「記念節日資料」中の 毛沢東略伝

---

国民党政権期には、教育部が発行する公的な『国民曆』の他に、民間の出版社が独自に

曆書や記念日の解説書を多数刊行していた。戦中・戦後には特に記念日が大幅に増加したこともあり、この種の書籍が盛んに出版された<sup>(36)</sup>。たとえば、支念慈編著『紀念節日史略』（上海：新夏図書公司、1947年8月）、許育藩編『節日紀念日教学法』（上海：商務印書館、1948年2月）、謝海華編著『紀念節日手冊』（上海：独立出版社、1948年7月）といった書名が挙げられる。ここから、上海など南方の都市部で、共産党の勢力下に入る直前まで、国民党政権の記念日に関する「記念節日資料」が流通していたことがわかる。

一方、同時期の共産党の農村根拠地では、通書（伝統的な民間曆）を基礎に徹底的な改造を加えて編纂された「農家曆」や、古い通書の体裁を維持した曆が流通しており<sup>(37)</sup>、こうしたものは中華人民共和国成立後の1954年頃まで存在していたようである。

中華人民共和国が成立し、前述のように各種の記念日が決定されると、新年度の開始の前に、やはり複数の民間書店から「記念節日資料」が出版されたことが確認できる。これらは書名・形式ともに、国民党政権期のものをほぼそのまま継承したものだ。以下、確認できた範囲で、これらの「記念節日資料」に掲載された毛沢東誕生日に関する記事の内容を分析し、そこにどのような特徴があり、それがどのように変化していったのかを見ていきたい。

## 1 1950-1951年の「記念節日資料」中の毛沢東略伝

(A1) 黄山編『紀念節日史料』上海：春明書店、1950年7月。

春明書店は1932年に陳兆椿が創業した書店で、1951年には90種、1952年には50種の書籍を刊行している中堅出版社である。専門は「通俗参考」で<sup>(38)</sup>、実用的な辞書・教材や「新地理知識叢書」「中国文学名著叢選」などを出版していた。本書には「附録」として「全国年節和紀念日放假辦法」を掲載していることから、同辦法の公布を受けて作成・出版されたものと見て間違いない。この点は以下の類書にも共通する。

巻頭の「編輯大意」には次のようにある。

一、在每一個紀念節日，許多文教幹部、教師、學生、報社、期刊社等，往往會遭遇到蒐集資料的困難。所以，編者力求簡賅精當地闡明紀念節日的史實和紀念意義，藉以滿足簡短的紀念演講或報刊介紹文字的需要。

二、除掌握正確的立場觀點以外，史料最重真實性。如先烈渾代英的殉難月日，本來說法不一，冊內所根拠的則是青年團團中央於一九五〇年所公佈的，其真實性就無問題。同時，史料又重全面性，如「四八烈士紀念」，冊內除概括一九四六年四月的時事形勢，說明四八烈士的殉難，是國民黨反動派在美帝指使下蓄意破壞和平發動內戰的結果外；



並附先烈王若飛、秦邦憲、鄧發、葉挺的事略，俾有進一步的明確了解。

三、民間習俗中的節日，除「春節」規定放假三天外，本來一般機關團體都不致有什麼紀念活動；可是為了深入群眾並將群眾提高一步，對群眾生活中若干例行的節日的正確了解，却是必要的。編者扼要地編集民俗方面的節日，並加以批判，就是為此。〔1頁〕

収録する記念日は全136種と非常に多く、「全国年節和紀念日放假辦法」に規定されたもののほか、辛亥革命以来の烈士記念日、ソ連をはじめとする社会主義国の記念日や偉人・指導者の誕生・逝去日、戦後に制定された各種社会団体の記念日、伝統節日などからなる。このうち、伝統節日は、実際には社会の需要に応じて収録されたものと思われる。他にも「万愚節」「羅斯福逝世紀念日」「聖誕節」や、社会主義と無関係な科学者・偉人の誕生・逝去日など、「正確的立場觀點」より商業的な売れ行きを意識したと思われる点がある。各記念日の内容に関するイラストや人物の似顔絵が挿入されているのも特徴である（図1）。後述の（A2）によれば本書は40000部以上を発行したとされ、日本の内山書店の内山完造も本書を入手したことについて書いていることから<sup>(39)</sup>、当時かなり流通したものと見てよいだろう。

本書における「毛主席誕辰」の説明は以下のようなものである。

#### 十一月十九日 毛主席誕辰

中国人民革命事業建設事業領袖毛沢東，字潤之，一八九三年十一月十九日出生於湖南湘潭。在長沙第一師範學堂畢業後，就組織新民學會，從事革命運動。一九一八年在北京大學圖書館工作，和李大釗等對馬列主義革命理論作深入鑽研。一九二〇年在湖南組織共產主義小組，一九二一年參加在上海舉行的中國共產黨成立大會。……〔北伐期の農民運動、紅軍の組織、ソヴィエト政權樹立〕一九三四年十月，中國工農紅軍，在他的戰略思想的指導下，粉碎了國民黨反動派百萬軍隊的五次大「圍剿」以後，為了北上抗日，又在他的正確領導下，開始震爍中外的二萬五千里長征。早在一九三一年「九一八」事變時，他看到民族危機日迫，号召全國人民奮起救亡，組織抗日民族統一戰線。……〔八年抗戰、人民解放戰爭、新中國建設〕在中國革命獲得基本勝利以後，一九四九年十二月出國訪問蘇聯，會晤斯大林元帥。接着和斯大林共同主持中蘇友好同盟互助條約的談判，使中蘇兩國七萬萬人民的兄弟友誼得到進一步的發展和鞏固。在完成偉大的歷史任務後，於一九五〇年二月十七日離莫斯科返國，三月四日返抵北京。他是中國最偉大的馬列主義理論家和實踐家，他將馬列主義的普遍真理和中國革命的具体實踐相結合，創立了中國革命的一系列的完整的思想體系，「毛沢東」三字，是中國革命

的勝利旗幟，是人民建設事業的輝煌燈塔。他所著的「論持久戰」、「論新階段」、「新民主主義論」、「論聯合政府」、「論人民民主專政」等，是指導抗日戰爭、人民解放戰爭和今後人民建設事業的寶典。〔71-72頁。下線は引用者。以下同じ〕



図1

以上の内容がどのような資料に基づいて書かれたかは明示されていない。ただ、毛の字が書かれている点、逆に出生地が湘潭までしか書かれていない点、人格に関わるようなエピソードが一切ない点、北京大學図書館で李大釗らとマルクス・レーニン主義を学んだとされている点、長征の話の最中に「九一八」

と抗日民族統一戦線の話が挿入される点、最近の事柄になるほど内容が詳しく、特に直近の訪ソにかなりの字数を割いている点など、(B)以降のものと比べると非常に独自性が強い。なお、毛の誕生日を陽暦11月19日と誤っているが、この点については(B)の項で述べる。

(B) 陸雨編『人民紀念日資料』広州：通俗文化出版社、1950年7月初版。11月再版。

以下は(A1)と同時期に刊行された初版の内容に基づく。表紙は毛沢東の肖像と大きな中華人民共和國旗・ソ連国旗、「毛主席万歳」「中華人民共和國万歳」「慶祝」と書かれた小旗をもち「秧歌」スタイルで行進する人民の絵である(図2)。巻末にやはり「附録」として「全国年節紀念日放假辦法」が収録されている。巻頭の「説明」には次のようにある。

上編的紀念日，是根據一九四九年十二月新華書店（京版）出版的「一九五〇曆書」，和「一九五〇年日曆表」所標示的紀念日彙輯的。下編的紀念日，則由編者收集中国和世界有關人民事業或個人的紀念日彙輯而成。

關於本書的內容，主要是根據中国歷史研究会〔中国現代史研究委員會〕編的「中国現代革命運動史」；鄧中夏著的「中国職工運動簡史」，華崗著的「中国民族〔解放〕運動史」；和新華書店出版的〔黃祖英、沈長洪、陳懷白〕「近百年史話」；聯共（布）中央特設委員會編的「聯共（布）党史簡明教程」；解放社出版的「論馬恩列斯」；胡繩著的「孫中山革命奮鬥小史」……〔ママ〕等書的資料所彙編的。

「上編」に43種、「下編」に69種の記念日を収録する。全体の構成としては、旧暦節日に関する記載がなく、また他の類書に見えるようなソ連の各種偉人についての記念日もないのが特徴である。「下編」に掲載されているのは、戦中・戦後にできた各種社会団体に関する記念日の他、様々な由来の記念日で、非常に雑多な印象を受ける。またレーニンの誕生日を間違う（正しくは4月22日だが12月25日としている）、魯迅の誕生日のみ旧暦である（陽暦9月25日ではなく陰暦八月初三日としている）など、全体に陰りや形式の不統一が目立つ。

本書の「上編」には「十一月十九日：毛沢東誕辰」が含まれている。そのため前述の「説明」に従うと、新華書店発行の1950年のカレンダーに毛の誕生日が含まれており、なおかつその日付は陽暦11月19日であったことになる。ただ残念なことに、新華書店編輯部編輯『一九五零年曆書』（北京：新華書店、1949年12月）の内容は現時点では確認できていない。そのためこの点については今後の課題としたい。

本書の「毛沢東誕辰」の解説は以下のようなものである。

#### 十一月十九日：毛沢東誕辰

中国共產党的創立者和建設者，中国人民革命的導師和領袖，殖民地半殖民地革命理論和实践的創造者，天才的政治家，戰略家——毛沢東主席，一八九三年十一月十九日，生于湖南湘潭的韶山冲，家務農。十七歲在長沙讀書，武昌起義時，曾入伍当兵，親身参加革命工作。以後，畢業于長沙省立第一師範，轉赴北京大学圖書館工作，學習馬克思主義。

一九二〇年，在長沙組織共產主義研究会，展開工人運動。一九二一年，出席中国共產党第一次全国代表大会——成立大会，任湖南湘区党委書記，領導湖南工農運動。……〔1927年の蔣介石のクーデター後、朱徳と工農紅軍を組織。「展開了十年蘇維埃運動，創立中華蘇維埃共和国」。長征、八年抗戰、人民解放戰爭、中華人民共和國樹立〕

毛主席是中国共產党的創始者和建設者，從一九二〇年共產主義小組的創立，到一九二一年中国共產党的成立，毛主席是創始者之一；一九二五—二七年大革命失敗後，毛主席以行動來糾正了機會主義的領導，一直正確地擔負了党的領導和建設工作，直至



図2

人民解放事業的勝利完成。

毛主席是新民主主義的創造者和領導者，他以馬列主義的普遍真理，結合中國革命的實際，成為中國，而至於一切殖民地半殖民地人民革命的真理。

毛主席是殖民地半殖民地國家人民革命武裝戰鬥的天才戰略家和戰術家，他的「中國革命戰爭的戰略問題」「游擊戰爭的戰略問題」，成為中國，而至於全世界殖民地反帝反封建革命戰鬥的勝利的戰爭原則。

毛主席的偉大成就，除了他的科學方法；科學預見之外，還在於他的群眾路線；謙遜果決，高度原則性，和處處為人民利益着想的優良作風。這正是毛主席的偉大及其成功的道路。〔50-52頁〕

以上のように、中華人民共和國成立までの毛の経歴を紹介した後、中国共産党の創立者、新民主主義の創造者、天才戦略・戦術家、科学的な作風、という各方面から毛を称え、また1920年の共産主義小組の組織をもって毛を先駆者と位置づける。

対照すると、前半部分は明らかに前述の蕭三「毛沢東同志略伝」(もしくはそれを元にした二次文献)を元に書かれたものである。

深湛的思想家，傑出的理論家，淵博的學者，偉大的人道主義者，卓越的人民政治家，軍事家，戰略家，中国共産党的創立者与建設者，党中央委員會主席，中国人民偉大的導師和領袖——毛沢東同志，一八九三年（陰歷癸巳，清光緒十九年）十一月十九日生於湖南省湘潭縣韶山冲。家務農。沢東同志很小就開始勞動。七八歲時入私塾，那時就反對讀死書。……十六歲入湘鄉高等小學，很得國文及經學教員等的器重。十七歲去長沙入中學。十八歲，值辛亥革命，武昌起義，長沙響應，沢東同志決心親自參加革命，因即入伍當兵（正規軍，新軍）。……辛亥革命流產，南北「統一」，沢東同志當兵半年後即退伍。……值湖南省立第一師範學校招生，學膳免費，沢東同志考入此校，五年而畢業。……一九一七年他發起『新民學會』，……一九一九年沢東同志遊北京，天津，上海。在北京大學圖書館作過小職員，業餘參加哲學，新聞學等研究團體。「五四」運動起，沢東同志在長沙組織湖南的學生和進步知識者，主編『湘江評論』，宣傳反帝，反封建，反軍閥，提倡民主与新文化。……第二次到北京時，沢東同志讀了許多關於蘇俄的書報。讀了「共產黨宣言」，「階級鬭爭」，「社會主義史」幾種書，建立了對於馬克思主義的信仰，……一九二〇年夏回長沙，作第一師範附屬小學主事，任第一師範某班國文教員。同時組織了「文化書社」，「青年圖書館」，辦「船山學社」，「自修大學」，「湘江中學」，組織「馬克思主義研究會」並實際作工人運動。一九二一年出席中国共産党第一次

代表大会，亦即成立大会。回到長沙，正式成立湖南党的組織，任湘区（湖南全省兼江西萍鄉安源地区）党委書記（一九二一—二三）。……<sup>(40)</sup>

少年期については年代ではなく毛の年齢で書かれるのも「毛沢東同志略伝」の特徴だが、それも踏襲されている。ただ、ここから生じる問題については（C1）の項で述べる。

蕭三「毛沢東同志略伝」を基本的な参照元とするのはおおむね以降の類書に共通している。ただ面白いのは、それらがそれぞれ、「毛沢東同志略伝」のどのエピソードを採用するかで異なったり、あるいは「毛沢東同志略伝」自体の誤りをそのまま引き継いだりしていることである。

たとえばこの（B）では、毛が辛亥革命に参加したことが強調される一方、五四運動期の活動には全く触れられていない。「毛沢東同志略伝」では北京大学図書館で働いた時ではなく、二度目の北京滞在時にマルクス主義を受容したとされているが、その点が曖昧になっている。一九二〇年に長沙で組織したのも「毛沢東同志略伝」では「馬克思主義研究会」、（B）では「共產主義研究会」となっている。

中国共産党成立以後については内容が「毛沢東同志略伝」とだいぶ異なり、また別の資料に基づいて書かれたものと思われる。そもそも「毛沢東同志略伝」の中国共産党成立以降に関する記述は、毛の党内における役職の変遷に偏っていて、同時代の中国全体の歴史と毛を関係づけた内容ではないため、一般向けの書籍には使いにくいのである。加えて、中国共産党成立以後の毛の事跡については、蕭三の文章以外にも参照可能な資料があったためであろう。

また、毛の著作として名前が挙がっているのが「中国革命戦争の戦略問題」「抗日游撃戦争の戦略問題」のみというのかなり異様である。これはやはり、共産党と無関係のライターが書いた、一般書店刊行書籍の記事という性格によるところが大きいものと考えられる。

（C1）蕭甘編著『記念節日史略』杭州：中国兒童書店、1950年7月初版。1951年11月の訂正9版の時点で30000部を発行。

中国兒童書店は、1950年代前半に、教材や、ソ連の兒童向け読みものの翻訳、「世界童話小叢書」などを刊行していた出版社である。初版は（A1）（B）と同時期に出ているが、以下の内容は著者が確認した1951年5月の第6版に基づく。

本書には前書きや凡例に当たるものはない。「附録」として「統一全国年節和紀念日放假辦法」が収録されているのは他の類書と同じだが、同じく附録の「廢除「六六」教師節

以「五一」為教師節日」(70頁)は増刷の際に追加されたものと考えられ、本文中の教師節の頁には「参閱第七十頁」の印が押しであった。こちらも(A1)と並んでかなりの数が流通したもののようである。72種の記念日を収録するが、この辺りから、各種社会団体に關する記念日や民間習俗を含む各種の雑多な記念日は完全に姿を消し、代わりにソ連關係の事件や偉人に關する記念日が急速に増加していく。

本書の「毛沢東誕生紀念日」に關する記述は以下のとおりである。

毛沢東誕生紀念日(十二月二十六日)

偉大的中国人民領袖毛沢東同志,一八九三年十二月二十六日(清光緒十九年旧曆十一月十九日)誕生於湖南省湘潭縣韶山冲。……

毛沢東同志家務農,很小就開始勞動,八歲入村塾讀書,十六歲入湘鄉高等小学,十七歲轉到長沙進中学,那時他就反对死讀書,具有頑強的鬭争性,敢於反抗旧社会的傳統思想——例如迷信鬼神、敬畏權威、崇拜勢利、追求虛榮等,他勤於學習,善於思考,探究真理,十八歲時,辛亥革命發生,武昌起義,他即投入革命軍,決心為革命戰鬪,後來,南北議和,革命半途而廢,他就退出軍隊,考入湖南省立第一師範学校,越五年畢業後,到了北京,由楊昌濟介紹入北京大学圖書館任助理員(館長是李大釗),同時旁聽功課。五四運動後,回長沙主編「湘江評論」,宣傳反帝、反封建、反軍閥、提倡民主与新文化,並組織「新民学会」、「湖南改造大同盟」、「馬克思主義研究会」、「社会主義青年团」等革命团体,宣傳革命真理,進行革命運動,開始表現出他的实事求是与結合群衆的偉大的而独特的性格。

毛沢東同志精通馬克思列寧主義,熟悉中国歷史与国情。……〔毛沢東思想は〕不僅發展國際革命導師馬、恩、列、斯關於東方被压迫民族革命的理論,解決了許多中国革命前輩經過長期的思索与争辯所不能解決的問題,而且批判地研究了中國歷史上自孔子至孫中山的思想學說,集五千年來中国文化之大成,成為中華民族的智慧之最高表現。〔66-67頁〕

記述は中国共産党成立の前までで、以後の毛の経歴については「中国共産党誕生紀念日」「人民解放軍建軍紀念日」などの説明中で若干の言及がある。

まず、誕生日がようやく正確なものとなっている。蕭三「毛沢東同志略伝」から青少年期のエピソードが比較的豊富に引用されており、それらの間に毛の人格を称える文言が挿入されているのも特徴である。「毛沢東主席」ではなく「毛沢東同志」なのも同文の影響であろう。ただ、「反对死讀書……」の下りは、「毛沢東同志略伝」では7・8歳の私塾時代の

エピソードだが、これが中学入学後の位置に置かれている。また、やはり「毛沢東同志略伝」に従って少年期については年代ではなく年齢で記述しているのだが、そのため若干の問題が生じている。つまり毛沢東が長沙の湘郷駐省中学堂に入ったのが17歳（1911年春）というのは正しいのだが<sup>(41)</sup>、同じ年のはずの辛亥革命（辛亥八月十九日＝1911年10月10日）は18歳の時に起きたことになってしまっている。時系列について言えば、新民学会の組織も1918年（前述のように「毛沢東同志略伝」は1917年としている）なので、五四運動の後に置くのは誤りである。

楊昌濟と李大釗の名が見えるのは、蕭三の「毛沢東同志略伝」とは別の資料で補ったと考えられる。「湖南改造大同盟」<sup>(42)</sup>「社会主義青年団」の名も他の類書には見えない。一方、どの時点でマルクス主義を受容したかが明示されていない。また、末尾における毛沢東思想を中国の歴史と強く結びつける表現も他の類書には見られない。

このように、基本的には蕭三の文章に依拠しながら、時系列の誤りや、エピソードの取捨選択基準に不明な点が多いのが特徴と言える。

(D) 唐青編著『人民的記念節日』上海：上海編訳社、1951年4月初版。後に出版元を祖国出版社に変更し、1953年6月修訂三版、計10000部。

1951年の初版による。本書は「前面幾句話」として過去の革命の歴史を称え、「不要輕視了這些值得紀念、值得慶祝、值得警惕、值得高興的日子，這些日子的交織，正告訴了我們怎樣有了祖国，又告訴了我們怎樣進一步去保衛、鞏固祖国的獨立和安全！」（2-3頁）と主張する。巻頭に「全国年節紀念日放假辦法」を掲載し、「国定紀念日」（6種）をそれぞれ説明した上で、「全国重要城鎮解放日」の一覧表、「人民的、革命的及血的紀念日」（16種）、「革命人物的紀念日与慶祝日」（9種）、「一般紀念日」（5種）、「世界青年運動紀念日」（7種）、「中国青年革命運動紀念日」（12種）の紹介が続き、巻末に「記念節日簡表」が付されている。

巻末表で「毛沢東主席誕生紀念」は12月26日とされており（「朱德總司令誕生紀念」は11月30日になっている）、「革命人物的紀念日与慶祝日」の「毛沢東」の説明は次のようになっている。

毛沢東，是我国人民的偉大領袖和革命導師，一八九三年十二月廿六日即癸巳〔ママ〕年十一月十九日生於湖南省湘潭縣韶山村，農家子，長沙第一師範學堂畢業生。少年時即組織新民学会從事革命運動。一九一八年在北大当圖書管理員，嗜讀書。一九二〇年參加中共。北伐時從事農工活動。「四一二」事變以後，即到井崗山發展游擊戰爭。經過

土地革命、抗日戦争及人民解放戦争、勝利地領導人民完成了反帝反封建反官僚資本主義的新民主主義革命任務。毛沢東，是繼馬恩列斯後第一個無產階級的偉大的領導人物。毛沢東思想，作了中国新民主主義革命的一切工作的指針。〔44頁〕



図3

毛の誕生から人民共和国成立までを扱っているが、分量が短いため省略が甚だしく、前提知識なくこれだけを読んでも内容を理解するのは難しいだろう。「韶山冲」が「韶山村」となっていたり、「一九二〇年参加中共」となっていたりするものもあり他に例がない。後半部分では劉少奇の中国共産党第七次全国代表大会における「關於修改党章的報告」を引いて「毛沢東思想」を「馬克思主義民族化的優秀典型」と称えている。

(E) 齊鳴編著『紀念節日手冊』重慶：重慶聯合圖書出版社、1951年10月初版、3000部。  
巻頭の「例言」には「中華人民共和國的每一個人民都要求明確地認識人民自己的紀念日。為了滿足這種群眾性的要求，我們編定了這一本手冊。日期的考訂，史實的敘述，人物的介紹，以及紀念的意義等方面，我們都力求其正確、完整、詳細。……至於一般民間風俗和習慣中所奉行的或帶有封建色彩的節日，在編者嚴肅的立場和觀點上，是不相容的，因此，我們概不収録。」(1頁)とある。収録されている記念日は126種である。なお、巻末にはやはり付録として「紀念節日簡表」と「統一全國年節和紀念日放假辦法」が収録されている。  
「毛主席誕辰」は(陰曆)十一月十九日となっているが、その解説は、最後に「録自蕭三：「毛沢東同志的伝略」。按本文係一九四五年〔ママ〕所作」とあるように、蕭三「毛沢東同志略伝」を全文そのまま掲載してある。また、図3が添付されていた。

(F) 劉石編『紀念節日宣教資料』北京：建業書局、1951年11月初版、5000部。  
横書きになっているのが形式上の特徴である。やはり巻末に「節日放假辦法」を収録する。巻頭の「前言」には以下のようにある。「三」は(A1)の「編輯大意」に同じ表現が見える。



- 一、本書は根拠中蘇友協編の「中蘇大事日誌」、新華書店出版の一九五一年案頭日曆、並参考「人民日報」,「中蘇友好」,及其他材料編写而成的。
- 二、本書編写目的是在於滿足各機關、団体、学校等宣教幹部在紀念節日講演或做文字宣伝的需要。
- 三、本書係史料的編輯,所以除了掌握正確的立場觀點以外,並最重史料的真實性。
- 四、本書共蒐集紀念節日史料百二十餘条,民間習俗中的節日皆未列入。

記載のあるように、収録する記念日は120種である。「毛沢東主席誕辰」は陽曆12月26日となっており、以下のように説明されている。

十二月二十六日 毛沢東主席誕辰

中国人民偉大的導師和領袖毛沢東, 字潤之, 一八九三年十二月二十六日(陰曆十一月十九日)出生於湖南省湘潭縣韶山冲的一個務農的家庭。很小就開始勞動, 八歲入村塾讀書, 十六歲入湘鄉高小, 十七歲轉到長沙進中学, 那時他就反对死讀書, 具有頑強的鬭争性; 十八歲時, 又考進了湖南省立第一師範, 除刻苦自学外, 還積極參加領導校內各種活動。一九一七年他發起組織新民学会, 從事革命工作。一九一八年到北京, 由楊昌濟介紹入北京大学図書館任助理員(館長李大釗), 當時讀了很多革命理論的書, 和李大釗等對馬列主義革命理論作深入的鑽研。「五四」運動後, 回湖南長沙編「湘江評論」, 宣伝反帝反封建反軍閥, 提倡民主和新文化。一九二〇年第二次由北京回到湖南, 組織「馬克思主義研究会」等宣伝革命理論的团体, 並實際進行工人運動。

一九二一年七月一日, 中国共產党在上海召開第一次全国代表大会時, 他是代表之一。回到長沙, 正式成立湖南党的組織, 担任湘区党委書記。……〔大革命、国民党反動派叛變、朱德と工農紅軍組織、中華ソヴェト臨時政府、長征、抗戰、解放、中華人民共和国成立〕

毛沢東同志是中国最偉大的馬列主義理論家和實踐家, 他将馬列主義的普遍真理和中国革命的具体實踐相結合, 創立了中国革命的一系列的完整的思想体系, 「毛沢東」三字, 是中国革命的勝利旗幟, 是人民建設事業的輝煌灯塔。〔195-197頁〕

面白いのは、「字潤之」「和李大釗等對馬列主義革命理論作深入的鑽研」「毛沢東」三字, 是中国革命的勝利旗幟, 是人民建設事業的輝煌灯塔」などの箇所は(A1)と一致し、「具有頑強的鬭争性」「由楊昌濟介紹入北京大学図書館任助理員(館長李大釗)」などの箇所は(C1)と一致することである(いずれも蕭三「毛沢東同志略伝」には見えない内容)。一方

で (A1) は少年期の記述に乏しく、(C1) は時系列に誤りがあったのが修正されている。そのため先行する (A1) (C1) を含む複数の資料を突き合わせて書かれたものと推測される。文中で「毛主席」「毛沢東同志」の呼び方が混在しているのもそのためかもしれない。逆に、又引きが繰り返されることで、不確かな毛沢東の情報やイメージが拡散した具体的な事例とも言える。ただ、辛亥革命期の記述を全てカットするといった点に独自性も見られる。

このように、1950-1951年に刊行された「記念節日資料」掲載の毛沢東略伝は、蕭三「毛沢東同志略伝」に忠実なものがある一方、ある程度著者側の創意や独自性が見られるものもあった。こうした状況に変化が現れるのは1952年頃からである。

## 2 1952-1954年の「記念節日資料」中の毛沢東略伝

(C2) 蕭甘編『記念節日史略』杭州：中国児童書店、1952年8月修訂第1版、10000部。

(C1) の修訂版である。かなりの記念日が削除され、54種まで減らされている。毛沢東の誕生日については、理由は不明だが、わざわざ初版の12月26日から11月19日に変更されている。本文中では「偉大的中国人民領袖毛沢東同志，一八九三年（清光緒十九年）農曆十一月十九日（公曆為十二月二十六日）誕生於湖南省湘潭縣韶山冲」（64頁）としており、陰暦の日付を主に、陽暦を併記する形に変更されているため、混乱が感じられる。本文のおおまかな内容は同じだが、少年期のエピソードが大幅に削除されており、年齢の記述もすべて削除されている。ただ「反対死讀書……」の部分、「新民学会」の記述の位置はそのままである。『毛沢東選集』が中国人民と植民地人民の古典となる、と結ぶ。

(A2) 黄山編『節日、紀念日參考資料』上海：春明出版社、1953年6月初版、5000部。

(A1) の改訂版だが、内容はほぼ別物で、記念日を「新中国重要節日」（13種）、「兄弟國家重要節日」（14種）、「人物重要紀念日」（13種）に分類して解説する。伝統節日は完全に削除され、また1949年以前の歴史的事件に関する記念日もほぼなくなり、収録する記念日数自体が激減している。また、イラストも削除されている。巻頭の「前言」には以下のようであり、「人民政府」の指示から逸脱することに対する強い警戒が示されている。

大家知道，在某一個節日或紀念日應該怎樣進行紀念慶祝活動，這不但應該根拠人們自己的情況來決定，同時也必須遵照人民政府或有關上級的指示，並結合当前的中心工  
作來決定的。

……這裏必須附帶聲明的是：本書所列的節日、紀念日，只是人們生活中節日和紀念

日的重要一部分；而另一方面，本書所列の節日，紀念日，除人民政府明令規定者（均於文中説明）外，也並不意味着人們到了那一天就非舉行紀念慶祝活動不可。這一点甚望讀者注意，以免誤會。〔1頁〕

「毛沢東主席誕辰」は「人物重要紀念日」ではなく「新中国重要節日」に分類されている。前述のように（A1）の毛沢東略伝はかなり独自性の強いものだったが、（A2）ではほとんど蕭三「毛沢東同志略伝」を引き写したものとなっている。

毛沢東主席誕辰（十二月二十六日）

十二月二十六日是中国人民的偉大領袖和導師毛沢東主席的誕辰。

毛沢東主席是世界革命偉大導師馬克思、恩格斯、列寧、斯大林最忠實的学生，是中国人民革命事業和建設事業的天才舵手。

一八九三年十二月二十六日（農曆清光緒十九年癸巳，十一月十九日），毛主席誕生於湖南省湘潭縣韶山鄉的一個農民家庭，很小就開始勞動。十七歲，去長沙入中學。十八歲時，適值辛亥革命，因決心親自參加革命，曾入伍當兵（新軍）。辛亥革命流產後，毛主席當了半年新軍退伍，不久考入湖南省立第一師範學校。

一九一七年，毛主席發起組織新民學會，這個團體後來起着秘密的初期黨組織的作用。一九一九年「五四運動」發生，毛主席在長沙組織湖南的学生和進步知識分子，主編湘江評論，這個刊物影響及於南中國各省。為了組織反軍閥的實際鬥爭，毛主席曾經到北京、上海。他在第二次到北京時，讀了許多關於介紹蘇俄的書報，讀了共產黨宣言等書，建立了對於馬克思列寧主義的信仰。一九二〇年毛主席回到長沙，組織了馬克思主義研究會和社會主義青年團，並實際地開始從事工人運動。……

一九二一年，毛主席到上海參加了中國共產黨第一次全國代表大會，亦即成立大會。會後毛主席回到湖南，擔任黨的湖南區委員會書記，繼續領導開展工人運動。……〔45-46頁〕

共產黨成立以降についても記述は非常に詳細で、特に陳独秀・張國燾の打倒に大きな紙幅が割かれており、遵義會議の説明では胡喬木『中國共產黨的三十年』が引用されている。最後は、1953年以降、新民主主義から社會主義への過渡のために奮闘しなければならない、と結ぶ。そして陳伯達「論毛沢東思想」、劉少奇「亞洲澳洲工會代表會議開幕詞」を引用し、『毛沢東選集』を「馬克思列寧主義在東方的發展的典範」とする。

(G) 洪汎濤編『紀念節日史実資料』上集、上海：泰聯出版社、1952年12月初版、3000部。1953年11月第2版、1000部。洪汎濤編『紀念節日史実資料』下集、上海：泰聯出版社、1953年8月初版、2000部。

泰聯出版社は1951年に周少華が創業した書店で、同年に11種の書籍を刊行している小規模出版社である。専門は「民間文藝」で<sup>(43)</sup>、教材や児童向け読みものなどの出版が確認できる。本書巻頭の「編輯例言」では、出版目的を「主要是供給中小学、業餘学校教師以及工廠、企業、機關、部隊、農村、里弄等团体組織，担任文教工作的同志，在各紀念日節日作為宣傳的參考資料之用」としている（1頁）。

上集・下集合わせて79種の記念日を収録する。巻末の「重要紀念日節日索引」には11月30日「朱総司令誕辰」(前述のように正しくは12月1日)、12月26日「毛主席誕辰」があるが、いずれも本文中には記事がない。上集は再版されたようだが（収録する記念日などには変更なし）、上海で刊行されたにもかかわらず、これまでの類書に比べて初版の部数がかなり少ない。

(H) 湯穎編『人物・紀念節日』上海：陸開記書店、1954年4月初版、2000部。

陸開記書店は1910年創業の個人書店で、1951年に4種、1952年に12種の書籍を出版している。本来の専門は「戯曲歌曲」となっている<sup>(44)</sup>。

巻頭の「編輯凡例」には以下のようにある。

- 一、本書提供有關人物和紀念節日的參考資料。它的對象是機關、工廠、學校、团体、讀報小組、文教幹部以及需要瞭解人物和紀念節日的讀者。……
- 三、本書羅列人物和紀念節日較多，為適合目前讀者的需要，特別着重蘇聯的人物和紀念節日。……已逝世的人物，刊以逝世日期，不再重複刊登誕辰，……
- 五、本書資料來源，以一九五四年的「蘇聯小日曆」為主；其中並有編者歷年來因工作需要隨時搜集，摘錄的材料。此外並參考「蘇聯文藝」、「世界知識」等雜誌及各地報紙數十餘種，特此聲明。〔1頁〕

本文は「人物」（190種）、「紀念節日」（73種）からなる。「毛沢東主席誕辰」の記述は以下のとおりである。

毛沢東主席誕辰——十二月二十六日

毛沢東主席是中国共产党的偉大領袖、馬克思主義的大理論家和實踐家。他将馬克思

列寧主義的真理和中国革命的具体实践相结合，創立了中国革命的一系列完整的思想体系。毛主席是中国人民勝利的偉大的組織者。

毛主席在一八九三年十二月二十六日誕生於湖南省湘潭県韶山郷一個農民家庭裏。十八歳在湖南省立第一師範讀書，並在校内参加各種活動。一九一七年，發起組織新民学会，從事革命工作。一九一八年在北京大学図書館内工作，讀了許多革命理論書籍。一九一九年「五・四」運動時，在湖南長沙主編「湘江評論」，宣伝反帝反封建，提倡民主和新文化。一九二一年，在上海参加中国共産党第一次全国代表大会。回到湖南後，担任了湖南区委員会書記。一九二三年，在広州召開的中国共産党第三次全国代表大会，他被選為中央委員。一九二五年，回湖南積極領導農民革命運動。国民党叛変革命後，与朱德総司令会師井冈山，並成立紅第四軍，建立了革命根拠地。一九三一年十一月，第一次全国工農代表大会在江西瑞金召開，他被選為中央工農民主政府主席。一九三四年十月，由於党内部分的左傾領導者的錯誤，因而使紅軍進行了歷史上有名的長征。在一九三五年遵義會議上，糾正了一部分人的錯誤，從這時起中国共産党和中国革命，一直在毛主席正確的領導下，不斷獲得了勝利。……〔抗日戦争、内戦、中華人民共和国誕生、社会主義への過渡。197-198頁〕



図4

内容自体は（F）に近く、特に冒頭部分の毛沢東に対する称賛の辞はそのまま引き写されている。また、図4が添付されていた。ただ本書は収録している記念日が多い分、個々の記事の分量はかなり限られている。そのためか、毛沢東思想や毛の著作に関する言及が全くないのがこの時期の類書の中では逆に特徴となっており、全体に淡々と誤りなく事実を記したという印象を受ける。

## おわりに

以上、1950年に毛沢東誕生日と毛の略伝が掲載された「記念節日資料」が現れてから、1954年頃にそれが消えるまで、その内容を概観してきた。中華人民共和国成立当初、民国期と同様に盛んに刊行された「記念節日資料」には、当然のように毛沢東の誕生日と略伝

が掲載されていた。これらの内容は、基本的には蕭三「毛沢東同志略伝」を参照元として、後から見て誤りである部分も含めて、それぞれが一定の独自性をもつものだった。全体として見ても、初期のものは内容も民国期に作られた各種社会集団の記念日や伝統節日を含む雑多なものだった。それが次第に後になるにつれ、伝統節日などは削除され、代わりにソ連の偉人に関する記念日が圧倒的な部分を占めるようになる。毛の略伝も「毛沢東同志略伝」などの内容をより正確に反映したものとなり、画一化されていく。

さらに1952年以降は、「記念節日資料」自体は再版され続けるものの、(A2)を例外として、毛に関する記述は総じて短縮、簡略化、さらには削除されていく。また発行部数自体、後になるほど明らかに減少している。本稿で扱った「記念節日資料」の出版地は各主要都市にまたがっているが、たとえば上海では、1953年頃までに新聞社や出版業の公私合営化と党・政府による把握が進んでいる<sup>(45)</sup>。その影響も考えられるが、これ以後、「記念節日資料」の類の出版はほぼ完全に途絶える。中ソ対立が始まって以降は、ソ連の偉人を紹介する必要がなくなったという事情も関係しているのかもしれない。

例外は以下のものである。

(I) 胡芝編『我們的紀念日』北京：中国少年儿童出版社、1957年11月初版、22000部。

中国少年儿童出版社は、1956年6月に成立した、共産主義青年団中央直属の出版社である。横書き、簡体字となっており、また同書にはモンゴル語版なども存在する<sup>(46)</sup>。後々まで版を重ね<sup>(47)</sup>、長期にわたり、この種の書籍の代表的なものとなった。

内容は、“二・七”闘争記念日、“三・八”国際婦女節、“五・一”国際労働節、“五・四”青年節、省港大罷工記念日〔6月29日〕、“六・一”国際児童節、“七・一”中国共産党成立記念日、“八・一”建軍節、“十・一”国慶節、“十月社会主義革命”節〔11月7日〕、“一二・九”運動記念日、に限って来歴と意義を紹介し、「可以使小朋友們了解現在的幸福生活是怎样来的」とするもので、ここに毛沢東誕生日は完全にこの種の書籍から除外されることとなった。

中国共産党が毛の誕生日を公的に記念する行事を開始するのは毛の死去の翌年の1977年であり<sup>(48)</sup>、それが恒例となるのは翌1978年に「毛沢東同志誕辰八十五周年」として大々的に祝賀行事を開催して以降のことである<sup>(49)</sup>。

## 註

(1) 例えば、梅村卓『中国共産党のメディアとプロパガンダ——戦後満洲・東北地域の歴史的展開』御茶の水書房、2015年、を参照。

(2) 小野寺史郎「大清臣民与民国国民之間？——以新政時期万寿聖節為中心的探討」『華東師

- 範大学学報（哲学社会科学版）』第43巻第5期、2011年9月。
- (3) 小野寺史郎『国旗・国歌・国慶——ナショナリズムとシンボルの中国近代史』東京大学出版会、2011年、第9章「暦の上の革命」。
  - (4) 丸田孝志『革命の儀礼——中国共産党根拠地の政治動員と民俗』汲古書院、2013年、第1章「陝甘寧辺区の記念日活動と新暦・農暦の時間」、第3章「晋冀魯豫辺区の記念日活動と新暦・農暦の時間」。
  - (5) 前掲小野寺『国旗・国歌・国慶』268–269頁。
  - (6) 小野寺史郎「日中戦争期・戦後内戦期国民党政権の記念日政策について」石川禎浩編『現代中国文化の深層構造』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、2015年。
  - (7) 「劉伯承同志寿辰 各方馳電祝賀」『解放日報』1942年12月16日。
  - (8) 薛洪興「劉伯承」中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第41巻、西安：陝西人民出版社、1989年、1頁。
  - (9) 「沈鈞儒七秩寿辰 文化界準備慶賀」『新華日報』1943年12月15日。
  - (10) 沈譜、沈人驊編『沈鈞儒年譜』北京：中国文史出版社、1992年、1頁。
  - (11) 「解放区各地軍民紛紛致電 祝賀朱総司令六十大寿」『新華日報』1946年11月30日、「慶賀朱総司令六十大寿特刊」『解放日報』1946年11月30日、「中央局辺区辺参会劉司令員等電賀朱総司令六十寿辰」『人民日報』1946年12月1日。なお、これ以前に晋東南根拠地で行われていた朱徳の誕生記念を始めとする個人崇拜については、前掲丸田『革命の儀礼』165–167頁に言及がある。
  - (12) 「朱徳將軍年譜（一八八六—一九四六）——慶祝朱総司令六十大寿（延安廣播稿）」『新華日報』1946年11月30日。
  - (13) 中共中央文献研究室編『朱徳年譜』北京：人民出版社、1986年、1頁。中共中央文献研究室編『朱徳年譜（新編本）1886–1976』北京：中央文献出版社、2006年、1頁、では「12月1日（清光緒十二年農曆丙戌年十一月初六）」と陰暦の日付も併記している。
  - (14) 「延安各界籌備慶祝 朱総司令六十寿辰」『新華日報』（太行版）1946年11月29日、「朱総司令六秩大寿 延安各界熱烈慶祝」『人民日報』1946年12月4日。
  - (15) 「四百英雄興高彩烈 慶祝朱総司令万寿無疆」『新華日報』（太行版）1946年12月13日。
  - (16) 蔣崇偉、鄒秋龍「徐特立」中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第3巻、西安：陝西人民出版社、1981年、101頁。
  - (17) 「徐特立同志七十大寿 延各界將舉行慶祝」『新華日報』1946年12月13日。
  - (18) 「各解放区賀電紛馳 慶祝徐老古希大寿 中共中央辦公庁今晚舉行慶祝」「慶祝徐特立同志七十大寿」『解放日報』1947年1月10日、「延安中外人士昨日集會 熱烈祝賀徐老七十大寿」『解放日報』1947年1月11日、「徐老七十大寿 陝甘寧將慶祝」『人民日報』1946年12月15日。
  - (19) 「革命的人民教育家 徐特立同志七十大寿」『新華日報』1947年1月13日。
  - (20) 前掲小野寺『国旗・国歌・国慶』280–286頁。
  - (21) 「華北大学全体師生 熱烈慶祝吳玉章同志寿辰」『人民日報』1949年1月5日。
  - (22) 王宗柏「吳玉章」中共党史人物研究会編『中共党史人物伝』第10巻、西安：陝西人民出版社、1983年、1頁。
  - (23) 中共中央文献研究室編『毛沢東年譜1893–1949』北京：人民出版社、1993年、上巻1頁。2013年の修訂本も同じく陽暦日付のみ。中共中央文献研究室編『毛沢東年譜（1893–1949）』

- 修訂本、北京：中央文献出版社、2013年、1頁。
- (24) 謝覺哉『謝覺哉日記』北京：人民出版社、1984年、729・883頁。
- (25) 蕭三による毛沢東伝の成立過程については、丸田孝志「毛沢東の物語の成立と展開——日中戦争期から建国初期」『東洋史研究』第77巻第4号、2019年3月、に詳しい。
- (26) 蕭三「毛沢東同志略伝」『北方文化』第2巻第3期、1946年7月。
- (27) 蕭三『毛沢東同志の青少年時代』北京：新華書店、1949年、3頁。1980年の改訂版では、該当箇所はさらに「公曆一千八百九十三年（清光緒十九年）十二月二十六日（陰曆十一月十九日）、這所房子裏的毛家誕生了一個男孩子。這就是毛沢東同志，中国人民偉大的領袖和導師，我們的毛主席」と、陽曆の日付を主とし、陰曆を併記する形式に書き直されている。蕭三『毛沢東同志の青少年時代和初期革命活動』北京：中国青年出版社、1980年、6頁。
- (28) 「東北政委会規定 紀念節日紀念辦法」『東北日報』1948年4月17日。1931年、国民政府教育部が4月4日を兒童節と定めた。前掲小野寺「日中戦争期・戦後内戦期国民党政権の記念日政策について」。6月1日は1925年にジュネーブで開かれた子供の福祉世界会議で定められた「世界こどもの日」（Universal Children's Day）。
- (29) 「党委会的工作方法」（1949年3月13日）『毛沢東選集』第4巻、北京：人民出版社、1960年、1444頁。第2版（1991年）も同じ。ただ、毛沢東文献資料研究会編『毛沢東集補巻』第8巻、蒼蒼社、1985年、261-264頁が採録する「对党委工作的十一条指示」『解放軍報』1958年1月15日、ではこの規定に対応する項目だけが欠落している。
- (30) 「中共二中全会完滿結束 毛沢東主席向全会作工作報告」『人民日報』1949年3月25日。
- (31) 小林弘二『中国革命と都市の解放——新中国初期の政治過程』有斐閣、1974年。
- (32) 「政務院举行十二次會議 通過節日放假辦法 通令全国各地遵行」『人民日報』1949年12月24日。
- (33) 「中央人民政府教育部和中国教育工会全国委员会經共同商討後，認為應廢除「六六」教師節，改用「五一」勞動節為各級學校教師的節日。」「「六六」教師節廢除 改用「五一」為教師節」『人民日報』1951年5月1日。
- (34) 「本院在一九四九年十二月二十三日所公佈的統一全國年節和紀念日放假辦法中，曾以八月十五日為抗日戰爭勝利日。查日本實行投降，係在一九四五年九月二日日本政府簽字於投降條約以後。故抗日戰爭勝利紀念日應改定為九月三日。」「中央人民政府政務院通告 抗日戰爭勝利日改定為九月三日」『人民日報』1951年8月14日。
- (35) 「國務院修訂發布 全國年節及紀念日放假辦法」『人民日報』1999年9月22日。
- (36) 周俊宇『党国与象徴——中華民國國定節日的歷史』台北：國史館、2013年、前掲小野寺「日中戦争期・戦後内戦期国民党政権の記念日政策について」などを参照。
- (37) 丸田孝志「中華民國期の通書に見る時間と象徴」『アジア社会文化研究』第15号、2014年3月。
- (38) 『上海出版志』編纂委員會編『上海出版志』上海：上海社会科学院出版社、2001年、257・286頁。
- (39) 内山完造「祝祭日と紀念節日——国恥紀念日のあつた中国」『世界週報』第36巻第22号、1955年8月1日。
- (40) 前掲蕭三「毛沢東同志略伝」。
- (41) 前掲『毛沢東年譜（1893-1949）』修訂本、上巻10頁。数え年ではなく満年齢で計算している（数え年だと十九歳になる）。



- (42) 同前55頁では「湖南改造促成会」となっている。
- (43) 前掲『上海出版志』285頁。
- (44) 同前。
- (45) 張濟順『遠去的都市——1950年代的上海』北京：社会科学文献出版社、2015年、第3章「從民辦到党管：上海私营報業的改制与改人（1949-1953）」。
- (46) quu zii, *manai duruyuqu ödörmüüd*, 烏魯木齊：新疆青年出版社、1958年。
- (47) 胡芝、李樹權編著『我們的紀念日』瀋陽：遼寧人民出版社、1980年。
- (48) 「紀念毛主席誕辰八十四周年」『人民日報』1977年12月26日。
- (49) 「紀念毛沢東同志誕辰八十五周年」『人民日報』1978年12月26日。